

家族と家族幻想 7

坂口 伊都



親になると自分を取り巻いてい
る世界が一変した。流れる時間すら
違って感じた。今まで作り上げてき
た世界と相反する世界に身を置い
て、慣れるまでに時間がかかった。

子どもと一緒にいると、いつもは
見ないモノに目を向けるようにな
る。子どもが一所懸命に見つめてい
るから、私も何だろかなあと思いな
がら見ていた。

梅雨が明け、強烈な夏の日差しに変わり、暑さとの戦いの季節がやってきたと思えば、豪雨に長雨。気持ちが休まる時がありませんが皆さま、お元気でしょうか。オリンピック・パラリンピックが開催される中、自粛という気分にもなれないよねと思っていたら、過去最高の新型コロナの感染者、そして再度の緊急事態宣言で研修の調整を次々にしなければならなくなりした。8月分の研修は、ほとんど延期となり、冬場に日程取り直しましたが、果たしてできるかどうか疑問です。先が見えないしんどさを誰もが感じているのではないのでしょうか。

夏の蒸し暑さに触れると息子を出産した時のことを思い出します。息子を7月16日に生み、そのまま1週間ほど冷房完備の病室で過ごして、外に出たら日差しのあまりの強さに眩暈がしました。1週間間に季節がこれ程までに進むとは。完全に母子の身体は置いてきぼり状態です。それからは、体温の高い赤ちゃんにお乳をあげ、何度も何度も数えきれないほど抱っこをして、親子そろって汗

疹ができて、痒くて、暑くて、泣き止まなくて、どうしたらいいかと途方に就いていました。

前回は、同じカップルが夫婦をしながら、父として母として両親としての役割を課せられていることを書きました。夫婦になる時、私は夫の姓になりました。旧姓を失ったというより、旧姓の私から新生したかったから新たな姓になろうと思いました。そこには、嫁ぐという感覚はなかったもので、嫁を求められることに違和感があります。自分が「嫁」という括りを引き受けると、役目を果たすことが意識され、卑屈な感覚となり、家族を思いやろうとする気持ちが空回りしてしまうように感じます。

親になってから風景が一変しました。大人として生きていくと、自分のペースで回していきますが、子どもができるまでと全く思うようにいきません。これ程までに時間の流れが違ふことが驚きで、別世界に送り込まれたように感じました。子どもがいるのに、効率的にしようとして急いでみたり、子どもをせかしたりしても何もいいことが起きませんでした。

親になってみると、自分の知っている世界が偏っていることに気づきます。息子と見るアリの行列、車に電車。それらは、何の関心もなかったことです。新幹線の点検をするドクターイエローの存在を知ったのも息子がいたからで、今ではドクターイエローを見るとテンションがあがるようになりました。息子はもう成人しているのですが、不思議な現象です。

娘は、保育所に迎えに行くとダンゴムシをいっぱい集めて、「虫ごはん、どうぞ」と差し出してくれました。なかなかシュールなご飯ですが、頬を引きつらせつつも冷静さを装って「むしゃむしゃ、美味しいわ、ありがとう」と受け入れます。虫で、いちいち騒いでられません。「女は弱し、母は強し」とよく言います。娘も成人して、今は虫嫌いですが、その娘も母になったら、たくましくなるのでしょう。

親の世界は、眠くても眠らさえてもらえず、フラフラになりながらお乳をあげ、家事をしたくても、泣かれて進まない。私の姿が見えなくなると泣かれて、トイレも一人で入れさせてもらえない。子どもは、食欲に親を求めます。今となつては、あの頃が眩しく感じます。親として子どもと一緒に歩んできた濃厚な日々でした。

親になって新たな世界を知りましたが、逆に失うものは何でしょうか。子育て当時に感じていたのは、社会から置いていかれるような焦りを抱えていたことを思い出します。女性は、子どもを産んで母親になるか仕事一筋でいくかの選択を迫られているように感じていました。

子育て当時は、子どもがいるから長時間労働はできないからと思って働いていましたが、今でも時間に拘束される自由度の少ない職場で、働き続けられる正確ではないようで、子どもがいてもいなくても、あまり働きかたは変わらなかったのではないかという気がしています。子育て当日は、子どもがいなければ、男の人と同じようにバリバリ働いて認められるのに思っていました。それこそが幻想だったのかも知れません。集中する時はして、気を抜くときは抜いて、のらりくらいと働きたいタイプなので、時間拘束を強いられると息苦しさで、バリバリ働く前に折れてしまう自信があります。仕事は生きていく中で大事な部分となります。仕事にしがみつこうとする心理が働くのは当たり前のことです。収入を得て生活を持続



しているのに、その仕事を辞め別の仕事につくことはそれ相応の勇気がいります。私は、子どもがいるという大義名分があったから、いろいろな仕事にチャレンジすることができました。

今の時代、コロナ禍や IT の発達で暮らし方が様変わりしています。私が子どもの頃は、テレビが娯楽でしたが、今は見たい時に見たいものをみる時代となり、テレビ離れの時代に入りました。子どもの頃、あれほど楽しかったテレビを面白く感じなくなっています。子どもの頃は、テレビばかり観ていると依存症になる、子どもの成長によくないとさんざん言われていましたが、あれは何だったのでしょうか。今は、YouTube ばかり観ている子どもが、いっぱいいるようになりました。YouTube も、また何か新たなものが登場して、古臭いものとして語られるようになるのかも知れません。

こうして考えてみると、知らず知らずのうちに私たちは、これが常識と信じているものに縛られているのだとわかります。同時に人は、これさえしておけば世間からはみ出さない中に身を置かないと安心できないのでしょうか。時には、世間の中に渦巻いている枠組みに自分を無理して入れ込もうとして、生きていく選択肢を狭めてしまうこともあります。

私は、出産、子育てが仕事の幅を狭めるものどこかで決めつけていました。仕事をしていると、子どもの傍にいられないことに引け目も感じていました。子どもは自分より仕事の方を大事にしていると思っていないか、寂しい思いをさせているのではないか。その思いにも子どもか仕事かという考え方が影響していたのでしょうか。子どもも仕事も、そしてそのバランスを考えていくことが大事だったのかなと改めて思います。子どもを育てることで知らない世界が見えてくるのは確かなことで、それは自身の世界が広がりを持たせ、もっと自由な発想を受け入れられることなのだと思います。

子どもの頃から、ずっと言われてきた言葉やイメージは、引きずりやすい。私は、こうなんだと自分自身に暗示をかけているようなものだ。何をしてもできない子と言われ続ければ、挑戦することに怖さを感じるようになる。

その言葉にいつまで縛られ続けるかどうかは、他者との出会いにあるように思う。誰かが言葉にしてくると瞬間に出会えると抜け出せるものようだ。

人とコミュニケーションを取る時、言葉だけでなく、その人の表情や行動を感じながら目の前の人の状況を察しようとしています。その時は、その人の言った言葉をそのまま捉えるのではなく、本音はどこにあるか探します。コミュニケーションは、言葉が全てではないと言われますが、この「言葉」が人を縛ったり、気づきを与えたりと、人に与える影響力の大きさに改めて驚きます。

例えば、「一人は寂しい」という言葉に縛られたら、一人でいる時間を減らし、誰かといる時間を作ろうとする。誰かといるためには、周りとか合わせなければならぬ。周りの会話と合わせるのに

も神経を使う。周りに合わせているうちに、皆が口を合わせて言うことが正しいはずとそこに自分を合わせようと頑張る。縛られ方が緩ければ、一人の時間の大切さもわかるし、一人の時間を楽しめるが、縛りがきつくなれば一人になることへの不安が勝り、皆と過ごすことを優先させて落ち着こうとします。

ある人は、自分に自信が持てず、できないことの言い訳を次から次へと並べていました。その人は、母親に「何もできない子」と言われ続け、子どもが集団で遊んでいる場に行けずにモジモジしていると、「一緒に遊んできなさい」と無理やり押し出され、上手く遊べないでいると「お前は引込み思案で臆病者でダメな子だね」と言われ、「できない」や「ダメな奴」が上塗りされ、いろいろな事を挑戦しようとする気持ちが奪われているようでした。大人になってからも、ママ友に「できない、ダメな奴だと思われたくない」という気持ちが強く、友達に合わせることに必死になると言います。私と話している時も、無言の時間に耐えられず、無言の時間がなくなるように常に何か話題を持ち出します。一緒にいて、気を遣われていることは伝わりますが、そこに心地よさはなく、一緒にいても落ち着かず、苦痛すら感じました。私がその人に「疲れないですか？」と尋ねれば、「はい、疲れます。でも相手を不快にさせたいいけないと思って」と言います。不快にさせないように必死になって、実は相手に不快な思いをさせていることに気づいていませんでした。

子どもにも自分が親からされ嫌だったのに、同じように子どもを無理に輪の中に行かせようとしていると話します。それは、「自分のようになって欲しくないから」と言い、自己否定が痛々しく伝わっています。そして、「そんな自分を直さないといけないのですよね」と悲しみのこもった笑顔で言うのです。

まず、引込み思案は責められることなのでしょ

うか。少なくとも相手の状態お構いなしで、ず

けずけと踏み込んでくるような真似はしないでしよう。周りを見る目を持っているのかも知れないし、コツコツとした遊びが好みなのかも知れません。

何を理想にするかで見え方が変わります。この母と子どものタイプについて一緒に考えると、自分のペースで遊ぶことを楽しめ、エンジンがかかるまで時間をかける子のだとなり、焦るのではなく、子どものペースに合わせてみることを試しました。実際にしてみると子どもの笑顔が増えて、空気が和むのがわかりました。

この母は、子どもの頃から「何もできない子」という言葉に縛られていました。そして、自己否定をして、子どもには私のようにならないようにと、自分が親にされて嫌だったことをしていました。無理に押し出そうとすれば、子どもは余計に頑なに動けなくなります。せつかくの自分の体験も、その行動を制することになっていませんでした。ある言葉に縛られると、自分で考えることも止めてしまい、「どうしよう、どうしよう」と戸惑いが先に立ち、思考までの経路に行着かないのか、片方でわかっているのにその考えを自分の行動に結び付けなくなるようです。

よく勝ち組、負け組という言葉がありますが、何を持って勝ちなのか、どうなったら負けなのか私にはわかりません。死ぬ間際に「いい人生だった」と思えるのといいのでしょうか。世の中には、いろいろな人々が暮らし、多様な生き方をしています。自分に馴染みがある生き方以外に目を向けるのを止めるのは、自身の生き方を狭めることなのだと感じます。

子どもにより良く生きて欲しい
と願う気持ちがある。それをどう子
どもに向けていくかで違ってくる。

子どものためにと思っているの
に空回りをして、悪循環に陥ること
はよくあること。子どもを育ててい
くために大人自身も視野を広げて
受け入れていく努力がいるのだろ
う。

生まれたばかりの頃、笑えば可愛いと言われ、
ご飯を全部食べれば褒められ、歩き始めれば手を
叩いて喜んでもらえたが、成長と共にその称賛は
減り、いい子に育ててほしいと期待の目を向ける
ようになっていきます。何をしても微笑ましかつ
たはずなのに、いつの間にか叱ることばかりが増
え、叱ってばかりいる親としての自分に嫌気を感じ
る時もあります。叱ってばかりいても良くないと
わかりながら、行動を制するために叱らなければ
ならないそんな矛盾をいつも抱えていました。

その期待の一つに親自身が果たせなかったこと
を子どもに託そうとすることがあります。例えば、
自分は学校での勉強をあまりしなくて苦労をした
から、子どもにはそうなって欲しくないという話
はよく聞きます。勉強をしなさいと口うるさくし
て、子どもが学校の勉強を好きになるのかどうか
疑問です。同じ親のきょうだいでも上の子は勉強
嫌い、下の子は勉強好きということは起こってい

ます。学校の勉強が好きな子は、現代の社会の波
に乗りやすいでしょうが、勉強が嫌いな子はダメ
な子になってしまうのでしょうか。ダメにするか
否かは周りにいる大人次第だと感じます。大人と
して狭い世界しか許容ができないと子どもを責め
て、お前が悪いからこうなるのだと叱りつけ、叱
る親側も辛くなります。

子どもを責めず、子どもがいろいろな事に挑戦
できる勇気を持たせるためには、親自身がいろい
ろな人の生きざまを見ようとするのが大事なの
だと思います。それは、自分が見ようとしないと
見えてはきません。職業で評価を下すようなこと
をしていれば、子どもとの溝を塞いでいくことは
永久にできないでしょう。親の姿勢を子どもも見
ています。子どもは親を冷静に見て、一人の人間
としてジャッジをしているのでしょう。人間とし
て筋を通すことは大切ですが、多様な考えを受け
入れないことは違います。子どもは社会出て、親
ではない誰かと繋がりながら、これからの進む方
向を決めていきます。子どもは、親の分身ではな
く、一人の個人ですから、その中で生きる術を持
たせられてきたか、偏った思考に子どもを縛りつ
けてしまっていないか、振り返っています。

